

三好市池田町新山（鶴巣塚穴）古墳の調査

考古班（徳島考古学研究グループ）

岡山真知子^{1*} 小林 勝美² 西本 沙織³ 三宅 良明⁴ 中川 尚⁵

要旨：三好市池田町の新山古墳は標高255mという高所に立地する後期古墳である。今まで、あまり知られていなかった三好市の後期古墳の一端を解明しようということで、三好市教育委員会の依頼で調査を行った。ただし、実測調査に限るという条件がつけられたため、十分な調査は行えなかった。調査を行った範囲で考えると、特徴として積石塚の方墳という可能性が指摘できる。そこで、積石塚の関連から大室古墳群との比較を行った。また、主体部である横穴式石室は隣接する美馬郡の段の塚穴型石室とは異なり、畿内型石室であった。他の古墳との比較検討を通して、新山古墳の意義を考察した。

キーワード：高所立地、積石塚、大室古墳群、段の塚穴型石室、畿内型石室

はじめに

今回の調査は、三好市教育委員会文化財課からの依頼を受け、実施したものである。今まで、あまり知られていなかった三好市の後期古墳の一端を解明しようという目的で、調査を行った。ただし、実測調査に限るという条件がつけられたため、十分な調査は行えなかった。調査に関して、池田町歴史会の細田義秋氏をはじめ、三好市教育委員会文化財課の多大な支援を受けた。感謝したい。

1. 新山古墳研究史

新山古墳は、三好市池田町シンヤマの標高255mという高所に立地する古墳である。眼下にシマ古墳が位置し、対照的な位置関係にある。

これらの古墳は、『三好郡志』や『池田町誌』・『池田町史』に紹介されている。

『三好郡志』には、「鶴巣の横穴式は…玄室の丈八尺巾四尺二寸今所高さ中央にて三尺四寸四岩戸の所で高さ一尺三寸。奥壁は下より二尺四寸の所より「く」形である。羨道の幅玄室と同様岩戸の幅一尺と

一尺二寸厚さ二寸立石で其中央に一尺九寸の戸口がある。天井石六七寸に四尺厚さ三寸奥手は元の通り、其次の墜落して居るものは四尺五寸三尺厚さ前同段羨道の長さ二尺八寸外形現在底径四間高さ五尺である。此の土饅頭の一部に幅一尺八寸（丈は土中にありて不明）厚さ三寸のものあるは羨道の天井石ならんが石室の方位正南である」¹⁾と紹介されている。

次に、『池田町史』では、「石室の石組を露呈した古墳で原形復元は困難であるが、径十五メートル内外、高さ二メートル内外の円墳であったと考えられる。砂岩の割石で小口積みにし、緑色片岩数枚（残存三枚）で持ち送り式に天井を構築した無袖式の横穴式石室である。横穴式石室は、玄門石（高さ三〇センチメートル、幅二五センチメートル）を境にして玄室（奥壁・幅一二六センチメートル×長さ二六〇センチメートル）と羨道部（幅一一〇センチメートル、長さ一九〇センチメートル）が残存している。玄室の床面は、わずかに中央でふくらみをもっている。副葬品については、知られていない。」²⁾とある。

1 徳島市南末広町 2 小松島市江田町腰前 3・4 徳島市教育委員会社会教育課 5 徳島県立脇町高等学校
* 〒770-0865 徳島市南末広町4-31-901 TEL:088-622-3019

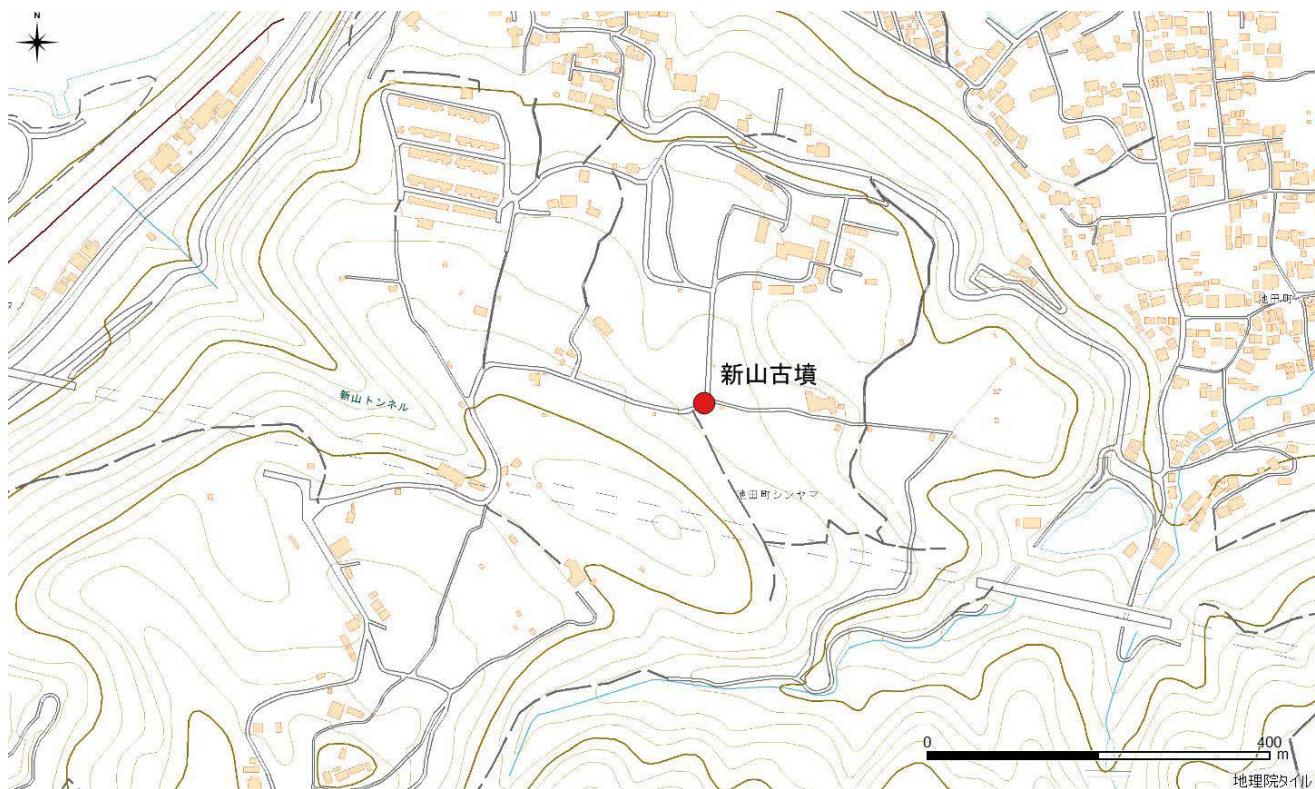


図1 新山古墳の位置（地理院地図で作成）

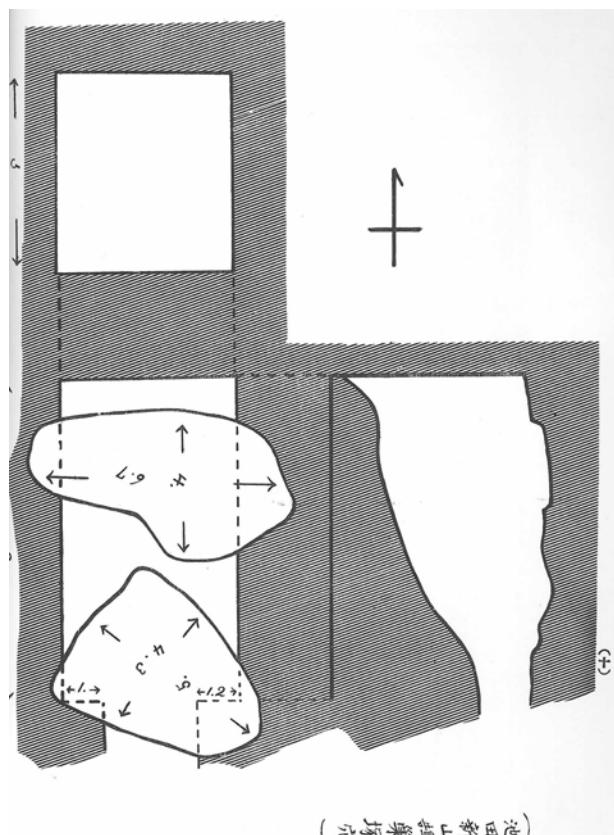


図2 鶴巣の横穴式略測図（『三好郡志』口絵）

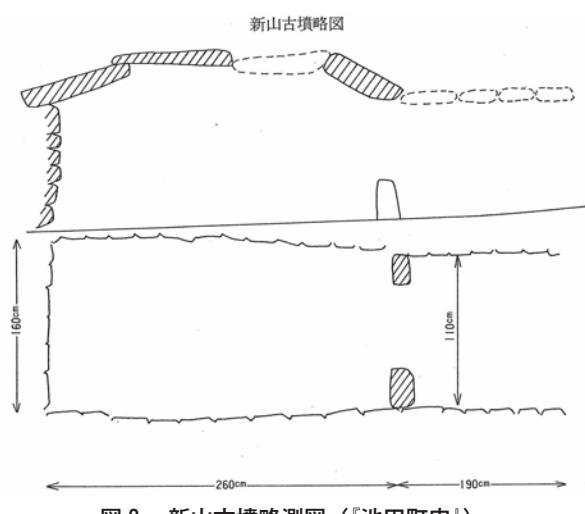


図3 新山古墳略測図（『池田町史』）

2. 三好市内の古墳

『三好郡志』には、旧三好郡内の多くの古墳が紹介されている。池田町では、山伏塚・天王山の丸山塚・摩利支天塚・姫塚澤山古墳などである。但し、これらの古墳は現存せず、詳細も不明である。その中で、前述した鶴巣の横穴式とともに、島古墳が詳述されているので、紹介する。

「池田町の字島に横穴式古墳があるが、包土は皆取去られた。今は玄室の天井石が露出して居る。方位は正南である。今残る所では丈け外法十三尺同幅六尺五寸高さ三尺で天井石の北端のものが六尺一寸に三尺一寸厚一尺。其次が五尺に三尺六寸厚さ埋れて見えん。南端が五尺六寸に二尺三寸。此三枚の両手に半分位露出して居る平石があつて其次に玄室の口の天井石が厚一尺五寸位のものがある。室内は石でつめて入ることが出来ぬ」³⁾とある。

その他の地域の古墳も紹介されているが、現存するものは少なく、ここでの紹介は控える。

旧池田町に現存している古墳は、新山古墳以外は前述もした島古墳だけである。『池田町史』では、「封土を全く失い、石室の石組みを露出している。原形復元は困難であり、石室の構造・規模を明らかにすることは、現状では困難を伴う。」⁴⁾とある。

旧井川町には須賀古墳がある。1997年の阿波学会井川町調査で考古班が調査し、報告した(図4)。

現状は、封土を一部残すのみであるが、円墳と推定される。

南に開口する横穴式石室を内部主体とする。ほと

んどが崩壊しており、奥壁(幅170cm・高さ70cm・厚さ18cmが現存)と玄門立石の上部(幅60cm・厚さ20cm)が残されているだけであった。残存する盛土の中には、天井石と考えられる石も2個積み込まれていた。その大きさは、長さ180cm・幅80cm・厚さ20cmと長さ120cm・幅65cm・厚さ20cmである。以上から、玄門部での幅60cm、奥壁部での幅150cm、玄室の長さ2.7mは復元できる。以上から長さ2.7m・幅2m程度の中央部が膨らむ形の玄室が想定できる。羨道部は全く不明である。また、気がかりな点としては、玄門立石が2組立っている点である。この立石が築造当時のものとすれば、いわゆる複室構造と考えられる。

旧三野町には芝生大塚古墳がある。『新編三野町史』によると、「古墳の周縁は削りとられ、今は玄室を残すだけである。玄室奥の壁石は露出し、玄室上の大石が古墳上に転がっている。原形は不明というほかはないが、昔の約三分の一くらいになった」⁵⁾とあり、現状も同様の状況である。

旧三好郡に目を広げると、旧三加茂町には多くの古墳がある。例えば、丹田古墳である。報告書によ

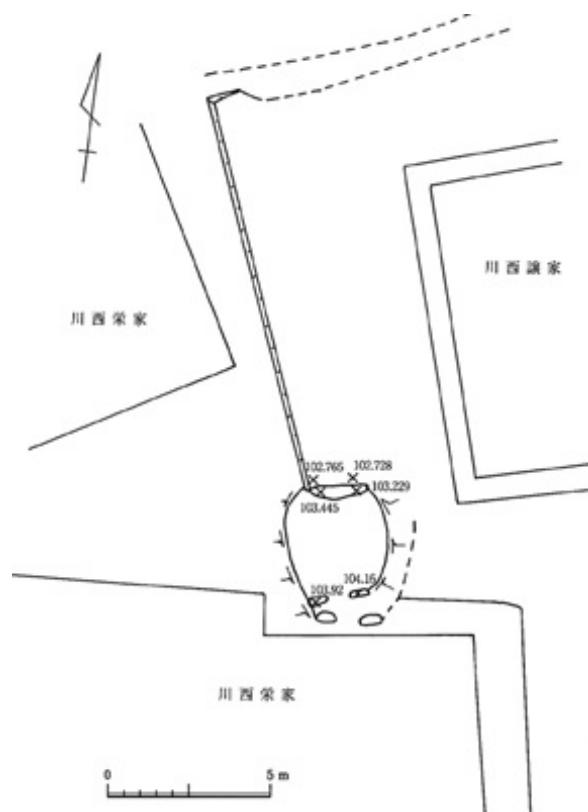


図4 須賀古墳実測図(考古班1998)

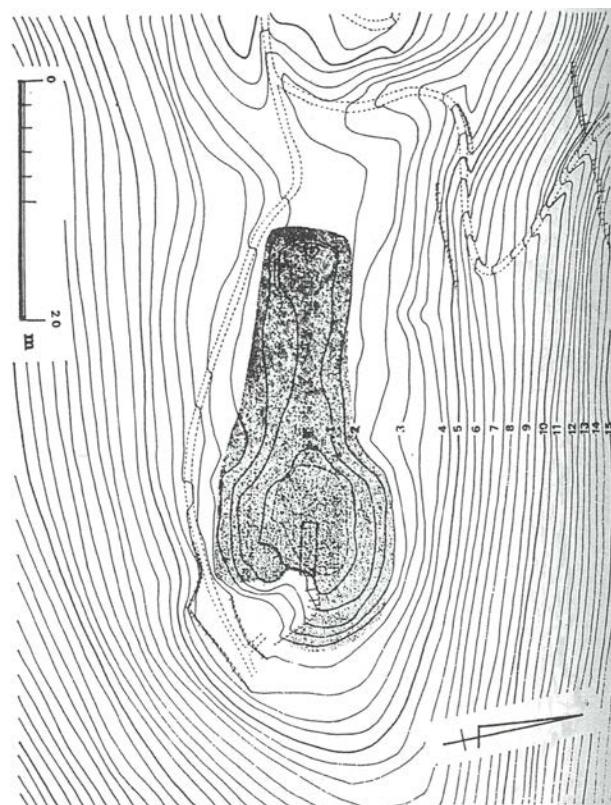


図5 丹田古墳実測図(森 浩一 1971)

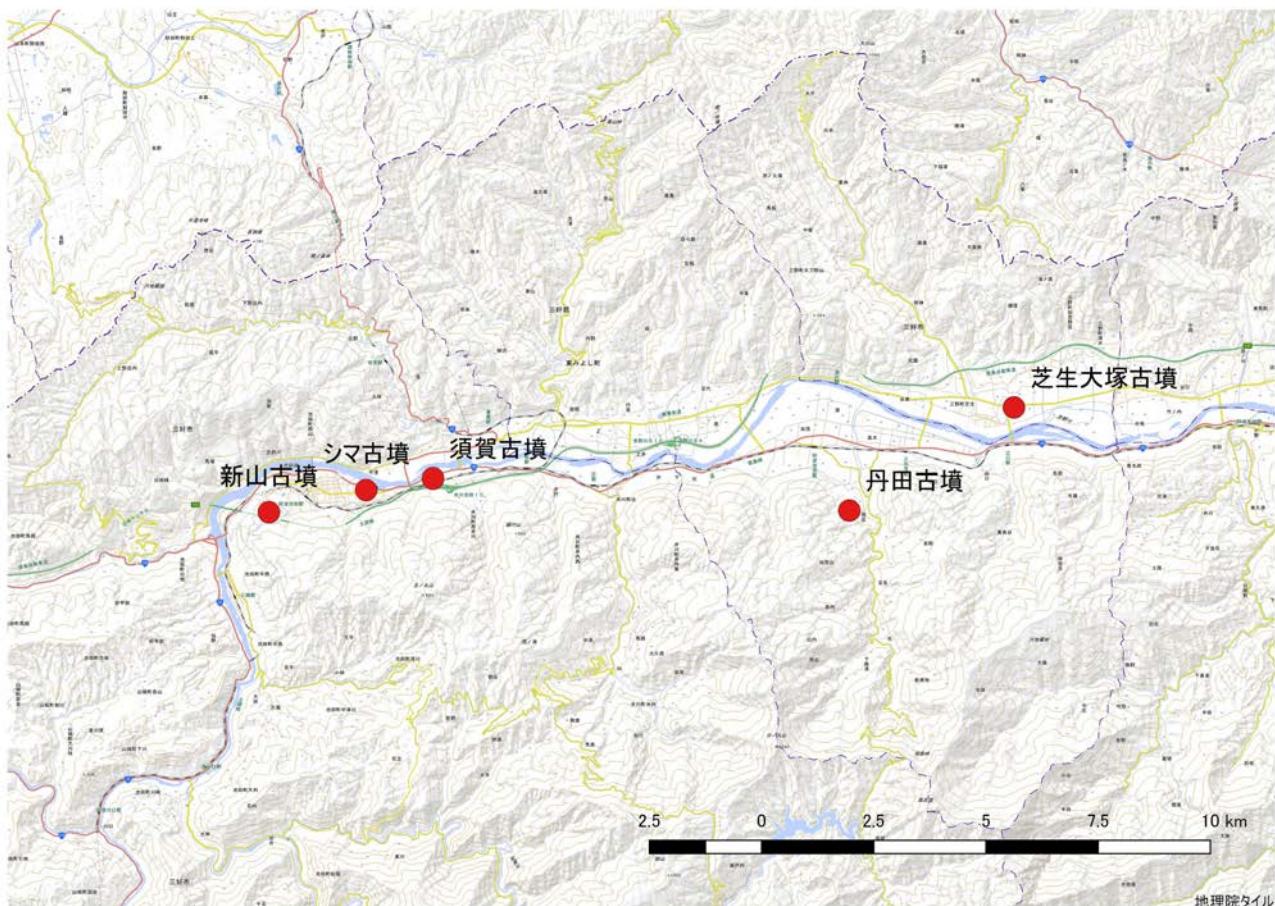


図6 三好市内および旧三好郡内の古墳（地理院地図より作成）

ると、「丹田古墳は加茂山から北東にのびる尾根の先端部、海拔約三二〇メートルの高所にある。積石塚の前方後円墳で、後方墳の可能性もある。全長約三五メートル、前方部の長さ約一八メートル、幅約六・六メートル、後円部径約一七・五メートル、高さ三メートル。埋葬施設は竪穴式石室で、結晶片岩を合掌式に積み上げている。長さ約四・五一メートル、幅約一・三二メートルである。銅鏡・鉄剣片・鉄斧・小型鉄騎片各一点が出土している。」⁶⁾とあり、4世紀代の築造と考えられている。

旧三好郡内には、その他貞広古墳群・鳴神社古墳群・極楽寺古墳群・八幡神社古墳群などが紹介されているが、詳細は不明である。

現状で把握できた古墳の位置を地図で示した（図6）。

3. 新山古墳の調査結果

(1) 墓丘

まず、この古墳で最も驚いたのが、積石塚と考え

られる石積みの存在であった。発掘調査をしていないので、断定はできないが、石室の石と噛み合っている点などから、築造時から積み石であった可能性はある。後世の開墾による改変の考えも捨てきれないが、積石塚の可能性としては高い。

墳丘は径10mの円墳か一辺7.5mの方墳とも考えられる。墳丘裾部を調査すれば、確定するが、今回は調査できなかったので、可能性として述べるにとどめる。

(2) 新山古墳の埋葬主体

新山古墳の埋葬主体は、横穴式石室である。玄室内に天井石が落下しており、今回は十分な調査ができなかった。また、床面も土砂が堆積しており、高さも不明である。こうした不十分な調査ではあるが、現状で長さ218cm + α・幅126cm・高さ102cm + αの玄室部と考えられる。

今回の調査では、計測できなかったが、『池田町史』には、幅110cm・長さ190cmの羨道部や高さ30cm・幅25cmの玄門石をもつと記載されている。これを

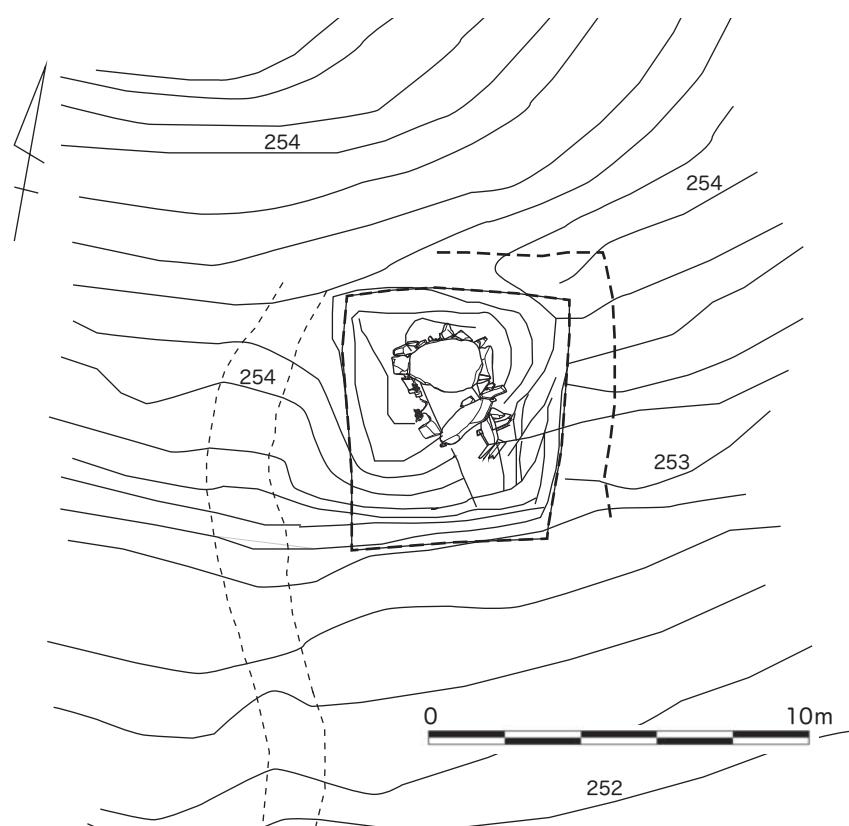


図7 新山古墳墳丘実測図
破線は、現状での墳丘範囲を示す 数値は標高を示す



写真1 新山古墳の墳丘の現状 南側



写真2 新山古墳の墳丘の現状 北側

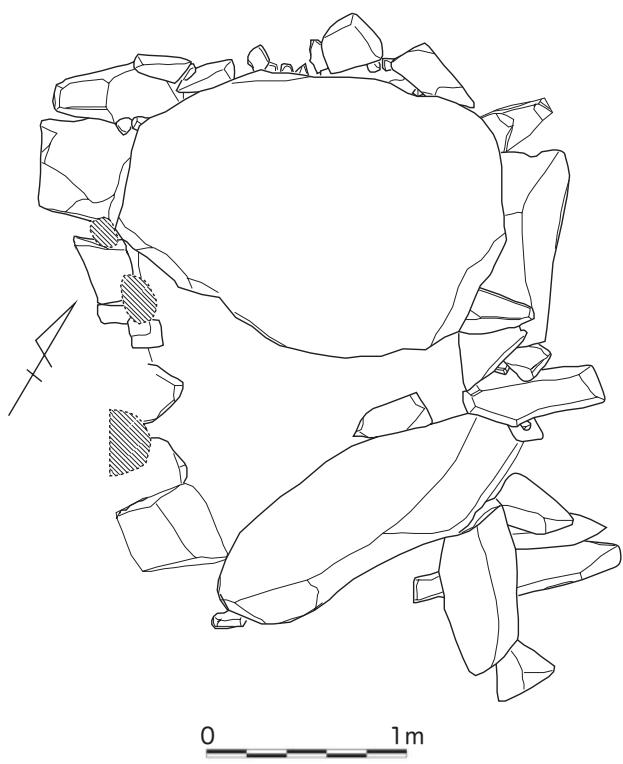


図8 天井石周辺実測図

参照すると、全長475cmと想定できる。

構築方法は、結晶片岩を小口に積み込んで側壁としている。

平面プランは、長方形で、両袖の型式である。天井石も玄室内に落ち込んだりしており、十分な調査ができなかった。原位置で残っているのが、奥壁側の1枚だけであるので、断定はできないが、水平に積んでいるようである。

結論は出せないが、畿内型の横穴式石室と考えられる。

(3)出土遺物

発掘調査をしていないが、墳丘で採集した遺物が3点ある。1点は、須恵器蓋壺の口縁部の破片である。あと2点は、近世の茶碗片であるので、紹介しない。壺蓋は、墳丘に生えている茶の木を抜いた時に発見された。おそらく、この古墳の使用時に使われていたものと考えられる。杯蓋は、口縁部の一部であり、口径16.0cm、器高1.7cm+αである。口縁端部が内湾気味に立ち、器高の低いタイプである。つ



写真5 奥壁



写真6 落下した天井石



写真3 上から見た横穴式石室



写真7 東側壁



写真4 横穴式石室全体



写真8 西側壁

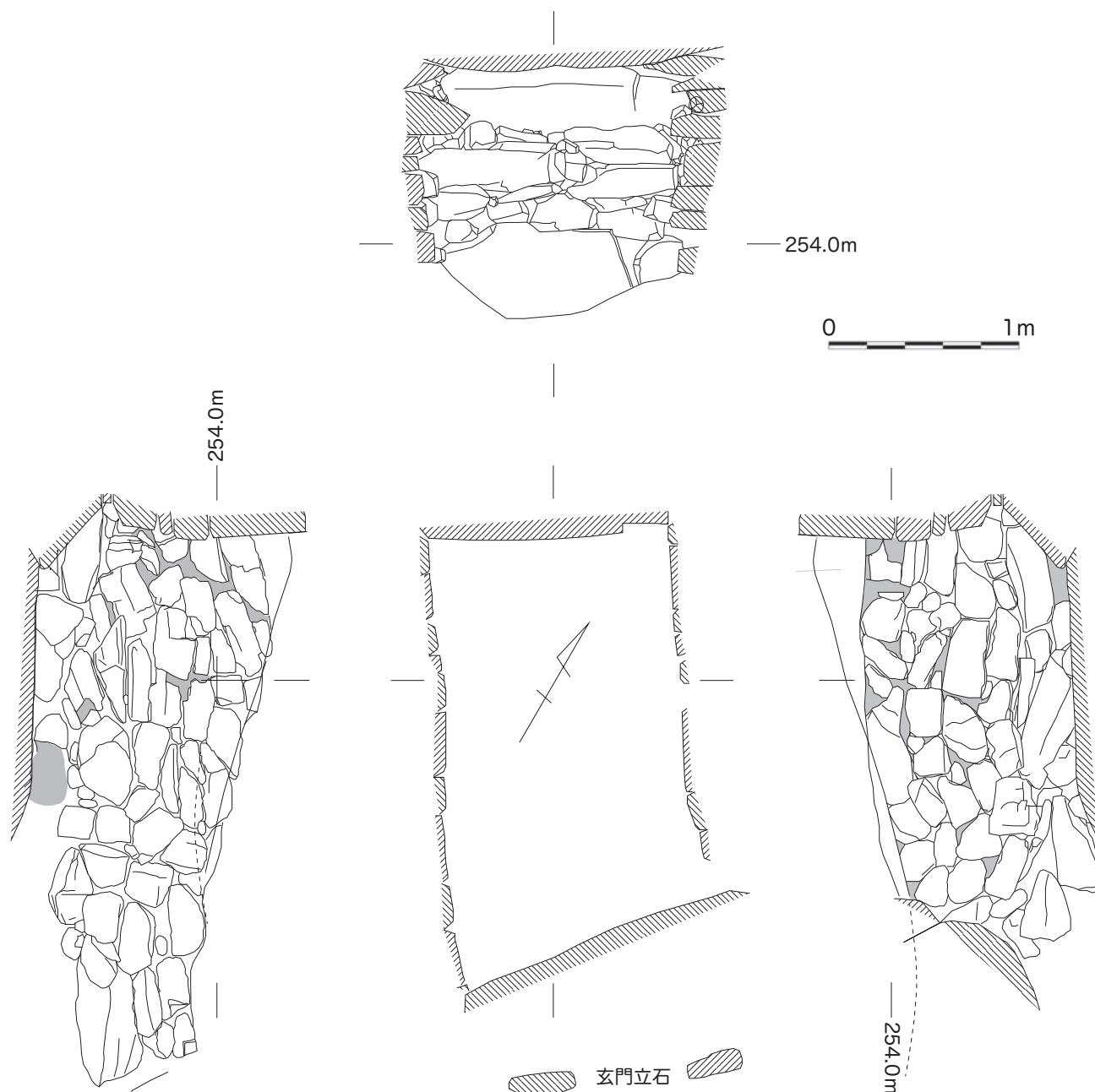


図9 新山古墳横穴式石室実測図

まみ部分が出土していないので、断定はできないが、TK209かTK217型式と考えられる。実年代で言うと、6世紀末から7世紀初めである。おそらく、追葬時の遺物と考えられる。

4. 新山古墳の意義

遺物が須恵器の小破片のみで、6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられるが、これは追葬時と考えられる。新山古墳の築造は、それより古く6世紀後半の築造と想定したい。ここで、新山古墳調査の意義

をまとめる。

- ①標高255mという高所に立地すること。
周辺に丹田古墳があるが、丹田古墳の標高は320

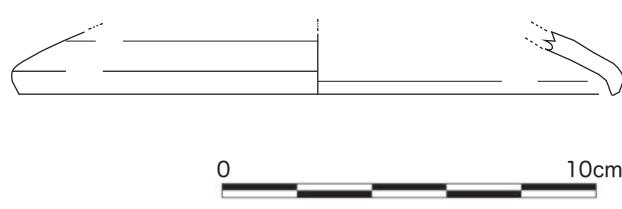


図10 須恵器壊実測図

mで、かなり高い。ただし、丹田古墳は前期古墳なので単純に比較はできない。

後期古墳で比べると、吉野川市山川町忌部山古墳群が標高244m、川島町鳶が巣古墳群が250mでよく似た立地である。

これらから見ても、後期古墳では最も高い位置に築造されている。ただし、新山古墳が池田町であり、眼下に見える島古墳の標高が84.8mである。そうすると、比高170mである。同様に考えると、鳶が巣古墳群が230m、忌部山古墳群が220mとなり、比高では50mほど低くなる。

②可能性として積石塚であること。

積石塚の古墳は、徳島県では丹田古墳や八人塚古墳など前期の前方後円墳で築造されている。特に、阿讚積石塚分布圏といわれるくらい、讃岐では多くの積石塚が築造されている。これはあくまでも前期古墳であって、後期古墳では珍しい。

全国的に見ても、後期古墳では長野県大室古墳群、福岡県新宮町の相島古墳群、山口県萩市の見島ジーコンボ古墳群などで確認されるが、数少ない。後二者は、海岸部という特殊な立地であるので、考察からは外し、大室古墳群と比較してみたい。

『史跡大室古墳群』から述べる。大室古墳群は、長野盆地の南東部、千曲川東岸の松代町大室地区を中心とした約2.5km四方の範囲に分布する、5世紀から8世紀につくられた総数約500基の群集墳である。

大室古墳群の最大の特徴は、積石塚・合掌形石室という全国的に珍しい構造をもつ古墳が集中して存在することである。大規模な分布調査の結果、総数約500基ある古墳は、1基の前方後円墳を除いてほとんどが直径15m前後の円墳で、遺体を納めた埋葬施設や埋葬施設を覆う墳丘の材質にいくつかの種類

があることが判明した。

古墳群でもっとも古い古墳は、5世紀前半につくられたと考えられる全長55mの前方後円墳である18号墳である。5世紀中ころから本格化し、合掌形石室（168号墳など）・箱形石棺（189号墳など）・竪穴式石室（195号墳など）を埋葬施設とする積石塚が6世紀前半までつくられる。6世紀後半になると、埋葬施設に横穴式石室が導入され、墳丘は土石混合墳が主流になる。大室古墳群で大部分を占めるこのタイプの古墳は7世紀末までつくられる。



写真9 大室古墳群168号墳（長野市教育委員会ホームページ大室古墳群の整備より引用）



写真10 整備された大室古墳群33号墳（横穴式石室）
（長野市2015より引用）

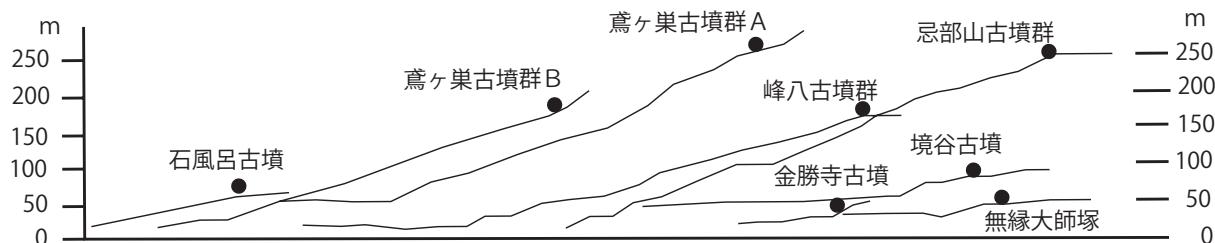


図11 吉野川中・上流域横穴式石室高度分布図（吉野川に直行して断面図を作成し、各古墳が重ならないように断面図をずらした。数値は標高を示し、高さを距離の2倍にして、強調した。）

③横穴式石室の特徴が畿内式であること。

隣接する旧美馬郡内の横穴式石室は段の塚穴に代表されるような特殊な石室である。筆者らが段の塚穴型石室と呼んでいるタイプである。それに対して、この新山古墳は典型的な畿内型石室であると考えられる。須恵器片しか出土遺物がないので、断定はできないが、おそらく6世紀後半に築造された古墳である。

前述もしたが、旧井川町の須賀古墳は、胴部が膨らみ、玄門立石をもつ横穴式石室を内部構造とする後期古墳である。いわゆる段ノ塚穴型石室の特徴（平面プランが長方形でなく胴膨らみで、天井石を持ち送る）をもち、複室構造の可能性もある。また、少なくとも3基がこの近辺に存在しており、群構造での分布も同じ特徴と言える。

④小規模な石室であること。

前述もしたが、新山古墳の玄室の大きさは $218\text{cm} + \alpha$ ・幅 126cm ・高さ $102\text{cm} + \alpha$ である。羨道も含めて、最大で 475cm である。

小規模の横穴式石室としては、徳島市恵解山7号墳が挙げられる（図12）。ただし、この古墳は発掘調査時点では半壊状態で一部しか残存していなかった。残存部で、玄室の長さ 2.1m 、幅 1.05m 、高さ 98cm である。元々の石室の長さ・高さはもっと大きくなるが、幅は変わらないと考えられるので、新山古墳よりも小規模な古墳である。

大きさは少し大きいが、よく似た型式の横穴式石室に、徳島市上八万町の樋口1号墳がある（図13）。玄室長 3.15m ・幅 1.73m ・高さ 1.57m の両袖式である。

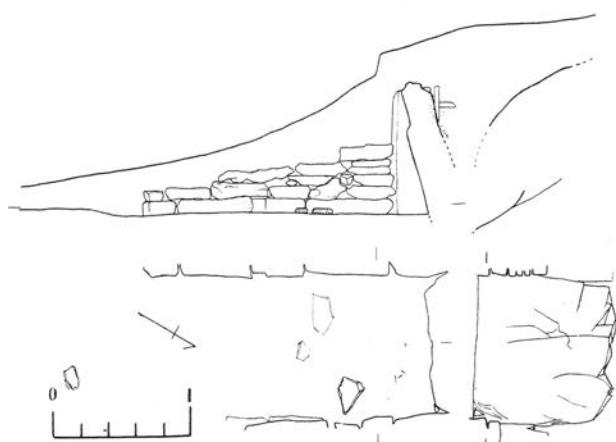


図12 恵解山7号墳実測図（末永・森1966）

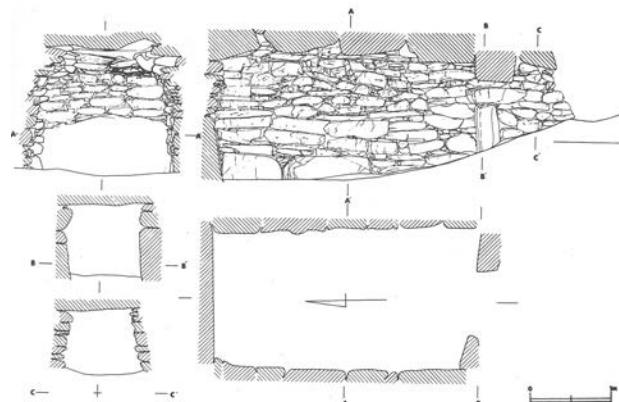


図13 樋口1号墳横穴式石室実測図（城東高等学校郷土研究部紀要第2号）

る。羨道は、長さ 3.0m ・幅 0.8m である。

以上からも、徳島市域の畿内型の横穴式石室との共通性が見いだせる。

⑤まとめ

従来から、旧三好郡の後期古墳は隣接する旧美馬郡との関連が高いと考えられてきた。旧井川町の須賀古墳はその傾向が強い。

今回、新山古墳の調査で、畿内型の横穴式石室であることが確認できた。

これらを基に吉野川上・中流域の横穴式石室の特徴をまとめた（図14）。

さらに、積石塚の可能性があることから、長野県大室古墳群との比較を行った。大室古墳群には合掌式の竪穴式石室が多くあり、これに横穴式石室が後続する。合掌式の竪穴式石室といえば、丹田古墳がある。時期的には、丹田古墳とは差があるが、積石塚であり、合掌式の竪穴式石室という墓制は共通する。こうした観点から、旧三好郡の古墳を見直していく必要がある。

おわりに

今回の新山古墳調査に当たり、地元の方々から多大なご支援をいただいた。記して感謝したい。また、三好市教育委員会には、地元の要望に応えるためにも、貴重な文化遺産の価値を高めるためにも新山古墳の保存のための調査をお願いしたい。さらに、貴重な文化財である新山古墳の保存活動にも取り組んでもらいたい。

池田町歴史会：細田義秋、内藤良一、矢武弘、中尾政一、内田忠宏、内田和子

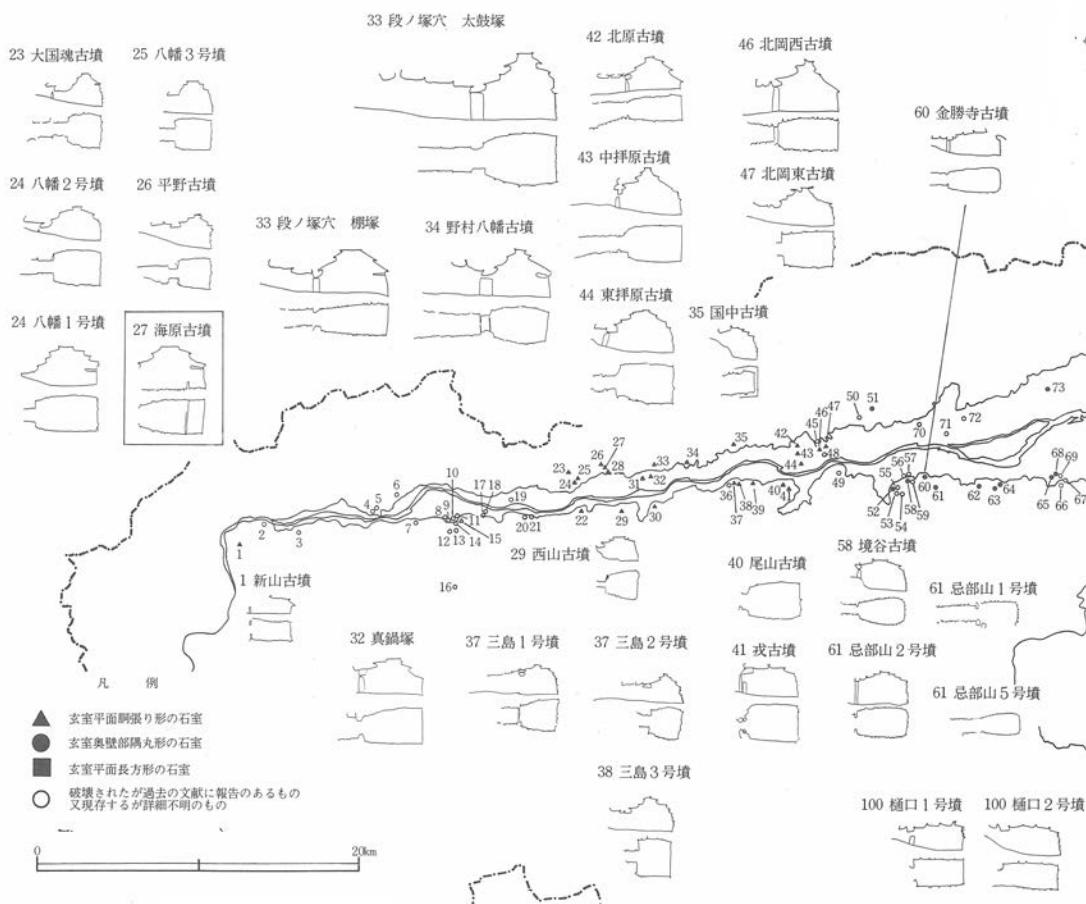


図14 吉野川上・中流域内の横穴式石室の分布（岡山・大塚1988を改変して作成）

註

- 1) 『三好郡志』 p.10~p.11 (本文に句読点はないが、読みづらいので筆者が付けた)
- 2) 『池田町史』 p.30~p.32
- 3) 『三好郡志』 p.12 (本文に句読点はないが、読みづらいので筆者が付けた)
- 4) 『池田町史』 p.32
- 5) 『新編三野町史』 p.75
- 6) 森浩一編1971 p.6 ~p.13を要約した。

参考文献

- 池田町誌編集委員会『池田町誌』池田町, 1962年
 池田町史編纂委員会『池田町史』上巻, 池田町, 1983年
 岡山真知子・大塚一志『海原古墳調査報告』『徳島県博物館紀要』第19集, 1988年

考古班「井川町における考古学的研究」『阿波学会紀要』44号, 1998年

- 新編三野町史編纂委員会『新編三野町史』三野町, 2005年
 末永雅雄・森浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第9集, 1966年
 田所眉東『三好郡志』三好郡役所, 1924年
 徳島県博物館『忌部山古墳群』徳島県博物館, 1983年
 徳島県立城東高等学校郷土研究部考古学研究班「徳島市内の古墳研究」『城東郷土研究』第2号, 1973年
 長野市『史跡大室古墳群エンタラスゾーン保存整備事業報告書』2015年
 長野市教育委員会『史跡大室古墳群』2015年
 長野市教育委員会ホームページ: 大室古墳群の保存意義
 三加茂町史編集委員会『三加茂町史』三加茂町, 1973年
 森浩一編『徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査報告』同志社大学文学部考古学研究室, 1971年

Survey of Shinyama Kofun (Burial Mound) Miyoshi City Ikeda-cho

OKAYAMA Machiko*, KOBAYASHI Katsumi, NISHIMOTO Saori, MIYAKE Yoshiaki and NAKAGAWA Shou
 * 4-31-901, Minamisuehiro-cho, Tokushima 770-0865, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No. 62 (2019), pp.083 – 092.